

第3章 史跡の価値

第1節 史跡の価値

新町支石墓群は、発掘調査によって弥生時代早期の支石墓をはじめ、弥生前期から中期の甕棺墓、古墳時代前期の箱式石棺墓が確認されている。いずれも砂丘上に作られた遺構で、個々の遺構や出土遺物、そして人骨が良好な状態で残されている。弥生時代早期の人骨がまとまって出土するのはこの遺跡が最初の例であり、死因が戦闘によるものとわかる人骨が含まれているのは、新町支石墓群だけである。また、周辺に大規模な開発が入っておらず、可也山を望む田園景観は往時の原風景を想起させる。

以下に、新町支石墓群の重要性、貴重性を挙げる。同時にこれらは遺跡を保存活用していく上でのポイントとなる。

① 支石墓の伝播、形成時期を明らかにした史跡

支石墓は、通称「ドルメン」とも呼ばれ、大きな上石を数個の石（支石）でテーブル状に支える形態をなした墓である。我が国の支石墓は、「基盤形」というタイプで、朝鮮半島南部にその直接の起源が求められ、西北九州の稲作開始期の遺跡だけに分布が限られる。新町支石墓群では第1次調査にて、57基におよぶ墳墓及び副葬品や遺物が確認されており、特に副葬品や遺物の出土により弥生時代早期、前期前半の墳墓であることが明確になった。うち、上石が原位置を保つ支石墓7基、移動された上石3個、上石を失い支石のみ残ったもの10基ほど確認されていて、検出された墳墓の3分の1以上が支石墓であったと考えられる。

② 埋葬された人々と文化が分かる史跡

縄文～弥生時代移行期の人骨資料は、全国的にも類例が極めて少ない。新町支石墓群に埋葬された人々の人骨は、低顔・低身長で風習的抜歯痕があり、諸特徴は縄文人に共通する要素が強いことがわかる。このことから、それまで考えられていた「弥生文化＝渡来人の文化」というイメージが覆され、弥生文化は、渡来系の先進文化と縄文時代の在地的要素の融合によって成立した、という新たな見方がなされるようになった。

また、24号墓の埋葬人骨（熟年男性）には左大腿骨に柳葉形磨製石鏃が刺さった状態で出土しており、戦闘による犠牲者を埋葬したと考えられている。戦闘による死者としては我が国最古級であるとともに弥生時代には人を殺傷する道具が渡来したこともわかる。加えて、この熟年男性人骨の下半身の下には小さな穴が掘られており、中から少年または若年の人物のものと考えられる2本の歯が出土した。穴の大きさから、頭部のみを入れたと推定される。殺された熟年男性の報復として、敵対集落の若者を殺害し、首級を熟年男性の足下に埋めることで弔いとしたとする説がある。いずれにせよ、当時の戦闘の激しさを物語る資料といえる。

③ 可也山を意識した支石墓の配置が分かる史跡

新町支石墓群の、支石墓を含む弥生時代早期～前期の墳墓の多くは、その主体部の主軸を東西方向に向いている。新町支石墓群の位置から可也山の山頂は、磁北を基準としてN-90°-E、南側の山裾はN-115°-Eを示すので、約70%以上の墳墓の主軸が可也山方向を示していることになる。また、支石墓に供献される副葬小壺が可也山側に置かれている、という調査所見から、現在の地域のランドマークである可也山は、当時の人々にとって同様の意識を生じさせていたものだろう。

第2節 史跡新町支石墓群を構成する要素

本史跡は、次のような諸要素で構成されている。



図 3-1 新町支石墓群を構成する要素

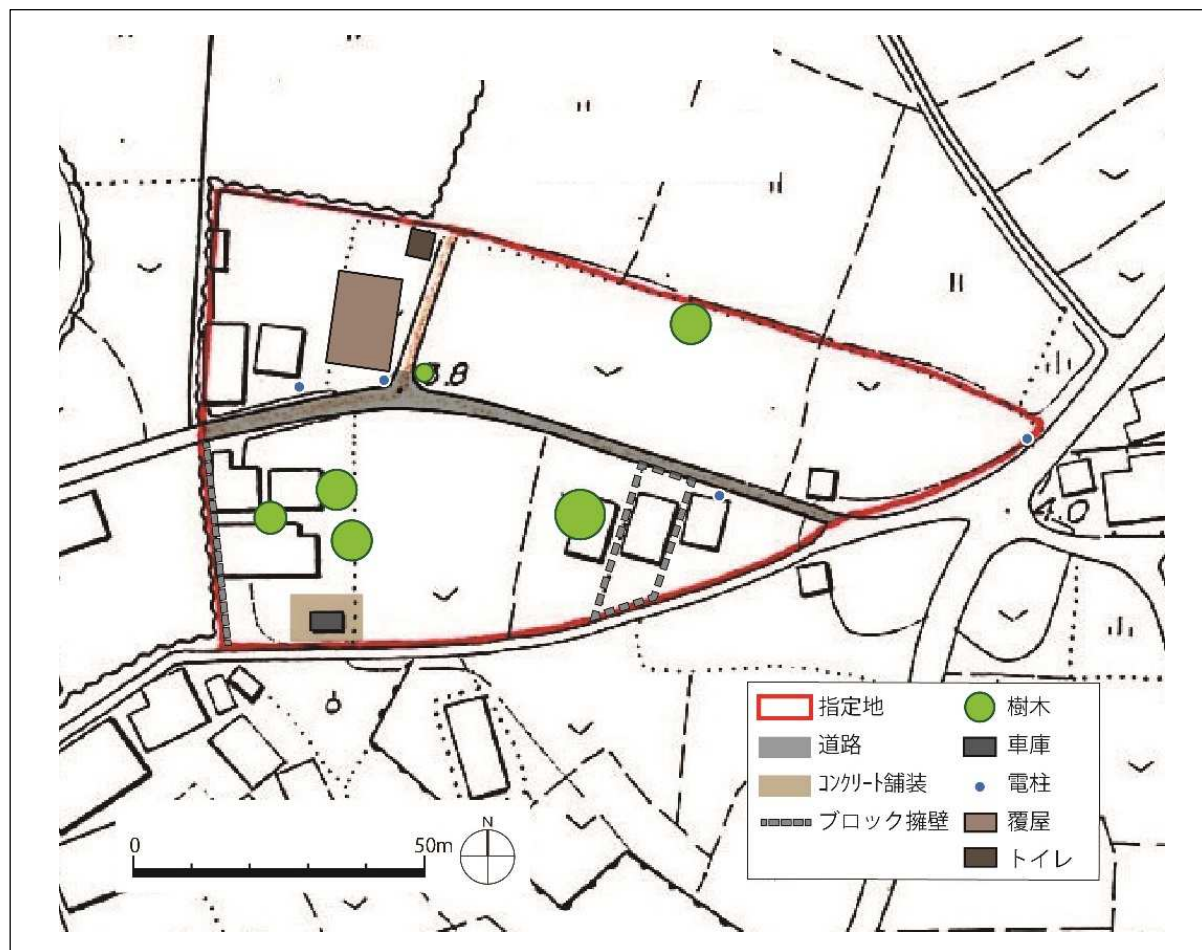


図 3-2 構成要素図



写真 3-1 A 価値を構成する要素



写真 3-2 B 史跡の保存活用に資する要素



写真 3-3 C 史跡の保存活用上調整が必要な要素